

皆様、こんにちは。山口県教職員団体連合会（県教連）委員長の島村 暢之です。

2月9日に韓国の平昌で開幕し、25日までの17日間亘り熱戦が繰り広げられた第23回冬季オリンピック競技大会。フィギアスケートシングル男子代表の羽生 結弦選手の2連覇やスピードスケート女子代表で今大会の主将を務めた小平 奈緒選手の500mでの金メダル獲得、カーリング女子代表のL S北見の銅メダル獲得等、会員そして県民の皆様も多く感動に浸ったことと思います。また、山口県に縁のある選手としては、郷 亜里砂選手がスピードスケート女子代表として出場を果たしました。テレビの前で熱い声援を送った方もいらっしやったことと思います。子供たちも選手の活躍を見て、夢を大きく膨らませたことでしょう。

さて、この度私こと島村は、平成30年3月31日をもって県教連委員長を退任することとなりました。遡ること1年前の平成29年4月1日に委員長に就任して以来、会員の皆様に支えられ、県民の皆様の負託に応える山口県教育を創造するために、主に上半期は教育研究全国大会開催に向けた活動等に、下半期は給与確定交渉等の活動に取り組んで参りました。これらの活動の中で感じたことを書かせて頂きます。

【教育研究全国大会を通して】

県教連は、子供たちへの教育を第一と考え、これを達成するためには、会員自らが資質向上のために努力しなければならないと考えています。そのためには、勿論書籍を読んだり、先輩教職員に相談したりして教職員としての土台を強固なものにすることが大切です。そして、県教連会員の皆様には、その土台の上に実践を積み重ね、力強く山口県教育を牽引していただきたいと思っています。そのためには、山口県から飛び出し、他県の取組を学ぶことが必要です。この意味で、教育研究全国大会は非常に意義深いものであったと思います。会員そして、県民の皆様を知っていただきたいこと。それは、全国にも「子供たちへの教育を第一」とする仲間が存在し、県教連はその仲間とつながっている教職員団体であるということです。

【交渉を通して】

子供たちのために自らの資質向上のために努力する必要があることは、先に述べました。しかし、現場においてその時間を十分確保できる環境があるかと言えば、それは否です。今の学校現場は10年前と比べても、「コミュニティ・スクールの推進」や「合理的配慮の実施」、「主体的・対話的で深い学びの実現」等、その業務は増えています。これまでも、地域・関係諸機関との連携や配慮を要する児童生徒への対応、授業改善等として取り組んできたものであるが故に「これまでの活動でいいんです。」や「新しく作るのではなく、今あるものを使いましょう。」という声を聞きます。しかし、現場はその活動1つ1つで必ずPDCAサイクルを回すように求められ、結果として会議の設定や説明に係る資料の作成、成果報告書の作成等の業務が加わります。つまり、新しい施策が現場に降りてくれば、必ず業務時間は増加することになります。私たちは、「子供たちへの教育を第一」と考え子供たちのためになることには、労力を惜しむことなく全力で取り組みます。しかし、時間には限りがあります。そこで施策や環境が現場にフィットしたものとなるように、交渉の場で現場の声を伝え、改善を勝ち取るために県教連が存在するのです。現場の教職員を取り巻く環境の改善は、「子供たちと向き合う時間」を確保することになり、よりよい山口県教育の創造に直結すると確信しています。交渉では、数が力になります。会員の皆様には、新規加入者獲得のために、未加入者への声かけをお願いいたします。県民の皆様には、子供たちそして、教職員のために活動する県教連のサポーターになっていただきますよう、よろしく願いいたします。

冒頭で紹介した羽生選手が、ショートプログラムでの演技を終えた時「ただいま」という言葉を口ずさむシーンが何度も放映されています。一時は選手生命も危ぶまれた怪我を乗り越えリンクに帰ってきた不屈の精神は、日本フィギア界を代表するというプライドが生んだものだと思います。4月からは全日本教職員連盟専従として勤務するわけですが、県教連代表としてこれまでの歴代の専従の先輩方の思い“県教連魂”を胸に、しっかりと職務を遂行して参ります。そして、数年後山口県に帰ってきたときには、胸を張って「ただいま」と言いたいと思います。

県教連専従の2年間、本当にありがとうございました。

平成30年3月

山口県教職員団体連合会（県教連）

委員長 島村 暢之